まつり・博多の四季[†]

(日03月11日58昭和)

西島 伊三雄*

紹介がありましたように、私はグラフィックデザイナーを職としておりますが、実は博多に生まれて博多に育って、軍隊生活を除いては、よそでいっぺんも暮らしたことが無いので、博多のことだけしかわからない男でございます。

私の仕事は、九州の観光ポスターなどが「振り出し」で、その他レッテルやマーク制作などをやっておりましたが、現在では郷土の祭りの絵と、素朴な私の「童画」が一般にはいちばん受けているようです。

一年中祭りばかり

博多という所は、年中祭りばかりじゃないかといわれるぐらい祭りが盛んなところです。私自身も良く参加しておりまして、今は祭りの準備を年中やっているみたいです。そのためか、「どんたく」や「山笠」のポスターのような絵を描いてくれんかという依頼が非常に多うございます。また、博多という所はありがたい所で、今まで山笠の絵だけで千枚以上描いたと思いますが、それだけでも飯が食えるというくらい、山笠というのは博多っ子のすべての気性を表わしているといったようなものを感じるのです。こんどの新しい県庁には、福岡県の五大祭りといわれる北九州の「小倉祇園太鼓」、「戸畑のちょうちん山笠」、「博多山笠」それから、筑豊では田川の「川渡り祭り」、久留米の「大善寺の鬼夜」などをモチーフにした大壁画を作らせて

図1

[†] The Festival in Hakata—A Glimpse of its Four Seasons

* 九州グラフィックデザイン協会会長、博多町人文化連盟理事長
Isao Nishijima 紹介者 編集理事 田中千秋

図2

いただきまして、11階においでになりますとご覧になることができます。織りものなので約1年ぐらいかかり56年の11月に完成しました。

地下鉄のシンボルマークができるまで

昨年の7月、九州で初めて開通しました地下鉄の試みとして、各駅の設計を変えるべきか、あるいは設計は同じで、色彩だけ変えていってはどうかといった問題が起こりまして、いろいろと検討していくうちに、結論としては、各駅に一つのシンボルマークを作ったらどうかということになったわけです。このシンボルマークについては、民間会社のようにしゃれたマークではなく、一般大衆の誰にでもわかりやすいマークを各駅に取り付けてみては、ということで、たとえば天神といったら「梅のマーク」というふうに、各駅のシンボルマークを全部作らせていただきました。

思い出通り建設にあたって

話は変わりますが、この半月ほど前から大濠公園で福岡'82大博覧会をやっております。神戸のポートピア博覧会の4分の1ぐらいの大きさでしょうか。とにかく大濠公園で博覧会をやったのは7年ぶりでございます。

私は、その全体的なプロデュースをさせていただきます。

て、このとき一つの提案をいたしました。それはポートピア博覧会で最も印象の強かった異人館通りを、福岡博覧会にも作ったらどうかというものでした。しかし「今ごろ古臭いことをやっても、未来に人間は生きていかんやらん」というような理由で、いったんキャンセルしかかったのですが「西島がいいだしたらいふこと聞かんから、何か隅のほうに作っとけ」というようなことで、博覧会の隅に昔の博多を再現した「思い出通り」というのを作ることに決まったわけです。

建て物は木造のかわらぶきで、昔の電球を付けたり、看板を揚げたりしておりますが、何様20軒ぐらゐの店がそろわないと、一つの通りにならないもので、あっちこっちスポンサーを募集に回りました。しかしなかなか家賃が高いので、申し込み手も少なく、私も一生懸命に走り回りました。これが以外とたいへんな人気でございまして、今度の博覧会の目玉といっても差し支えないほどでございます。

なお、看板や外灯や電柱といったものは、昔のものをしながら新しく作り取り付けたんですが、古いものとなると縄のれん一つにしても、現在では手にはいりにくいため結局、京都の撮影所から貸りてきたりしました。昔の看板なんか実にすばらしいものがございます。

さて、やっと町並みはそろったんですが、店でぜんざいやうどんや駄菓子売ったりする人達は、高い家賃を出しているから、“元を取らんとばからしい”というようになって、目の色を変えて商売商売になるわけです。それから、せっかく風景はできたけれど、中で働く人達の服装というのが全くなっていないし、第一動きが昔と違って非常に早く、しゃべりも早口なんです。ちょっとしたことです。それがなかなかうまくいかんわけです。それで一昨日は明治の衣装を貸り、人力車も引っ張り出しまして、とうとう“ちんどん屋”になりました。私は小学生の子供になりまして、番頭さんでちんどんにふんし、駄菓子屋でラムネなどを売ってみますと、これがなかなかすばらしい絵になったわけです。

祭り好きでおっちょこちょい

「博多っ子」というのは、最初に申しましたように祭り好きでおっちょこちょいで、宵越しの金は持たんというように人が多くあまり勉強しないですね。それから人情にもろい。人のためだったらよそから金を借りてきてでも貸してやるというような感じがあるわけです。そういうおっちょこちょいなところが、こういうふうな祭りを今日まで育ててきたんじゃないかという感じがします。

それから、もう一つは海外との貿易—（いわゆる海賊だったんでしょうけれども）—が盛んであったし、農業と違ひまして、海に行けば貝とか魚がとれるので、わりとおおらかにでき上がっております。少々おこられてもあんまりピンとこないようです。いつも朗らかで楽しく、ふだんは、女房のことなんか考えもしないというような顔をし

て、その実、非常に心配しているというふしぎな性格を持っております。

とりわけ、勉強ぎらいなところは昔ながらで（今は優秀な若い方が、いっぱいいらっしゃると思いますが）、私どもの時代ではほとんど本を読むのがきらいで、あんまり理屈をいうのがきらいで、というような形で育っております。また上品ぶったり、頭がいいというような顔をするのが非常に嫌われるという感じすら町の中にありました。

博多人の悪いところ

私は、テレビの対談でいつもお国自慢をしております。そこで、たまには博多をくさす番組を作ったらどうだろうと思っておりましたが、京都からおみえになったあるホテルの支配人さんに、博多の悪いところをいうてくださいといいましたら、「博多の人は勉強せん」ということを、まづいちばんにいわれました。確かに何かそういう感じががあるようで、〇〇銀行というのは、お金を預るところというはっきりしたものがありますが、信託銀行となるとちょっと理解しにくいと思ったりするぐらい、あんまり物事を考えないところがあるんですね。だから、東京、大阪から来た企業主に、「博多の経済は押し流されてしまうんじゃないだろうか。」というようにことをいわれたんですが、なるほど、そうだなという感じがなきにしもあらずでした。

それからもう一つ、非常に気ぜわしいということです。友達といっしょに飲み屋さんなんかに行き、料理が出されますとお客さんが食べようとするときに、「それはもうもうございしょうが。」というわけですね。相手が食べてもいないのに、「おいしいでしゅう。」というべきではないというようなことをいわれました。確かに私どもも「あすこには、べっぴんさんがいるから行きましょ。」といって、そこに着くなり「べっぴんさんでしゅうが」といいます。相手にしてみれば、べっぴんだとは思っていないのに、私だけが思っていて、そういうことを堂々といってしまうというんですね。それからもう一つ、博多っ子3人ぐらゐで飲んでいところに、旅人が1人ではいつてきた場合は、全く知らないふりをし、これが、同じ友達が連れて来た人ですと、もう10年も知己のような感じで、最初から何もかも打ちあけて話をするというようなところが、たぶんにあると思います。結局、博多というのは食べ物に豊富にあるので、そういうふうにおおらかで神経質な博多っ子を作りあげているのだと思います。

どんたくの起こり

箱崎のちょっと先に名島という所がございまして、小早川秀秋の時代、正月の三日に「松ばやし」が繰り込んだという文献があります。380年ぐらゐ続いているそうで、現在、無形文化財になっております。福祿寿を福神、その次に恵比須さんがいます。その後には大黒さんがいまして、福神、恵比須、大黒というような三福神が殿様のところに参内いたしまして、お正月のご挨拶をするのですが、そのと

きの後から、いろんな仮装をした人達がついていくわけです。これが“どんたく”の起こりといわれています。

どんたく禁止令から復活へ

明治5年に、こういう仮装行列はぜいたくだということと禁止令が出たんですが、明治9年の福岡と博多の合併時に、お祭り好きな博多っ子は、禁止されている「どんたく」を何とか復活したいと市に申請したわけです。そして明治12年ごろ、これが再び許可されたわけですが、その許可のしかたも博多っ子らしく、何かに引っ掛けないとおもしろくないというんで、「紀元節」の祝いに「どんたく」を復活させたんですね。

確か、私どもが子供のころは、招魂祭として4月ごろに「どんたく」が行なわれていたようです。

おやじの楽しみ

私の家は旅館でございまして、非常に三味線が上手で、こういうにぎわいごとが大好きでした。子供が成長するとすぐ「どんたく」に引っ張って出るというのが、おやじの楽しみだったような感じがします。そういうおやじですから、どんたくのときは姉や近所のおばさんや、ひょっとすると恋人もいたと思いますけれども、だいたい10人ぐらいでチームを組んで、三味線を弾きながら鼓に合わせて、すりがねとそれに私たち子供を連れて参加したものです。おやじは、プランを立てて一年中ごぶさたしているところにいくわけです。あすことあすこを回って、こっちへ曲って、あっちへ行って、あすこに寄らんといかんというようなことで、一日中博多の町を連れて回るわけです。

訪ねた家では、玄関に緋毛氈を敷いてじまんのびょうぶが置いてあります。私達は、「酒で酔った」ということと、「祝う」という意味の言葉を「ようたあようたあ」といって中へはいって行きます。すると、「久しぶり来らっしゃった。」というようなことで、そこで歌ったり踊ったり、博多仁和加をやったりして、帰りに「福笹」をもらいます。その「福笹」というのは、風せんとか、官製はがきとか、お面などがぶら下げてあって、そいつを襟に差してくれるんですね。この中の紙切れを持っていくと、「どんたく」が終わった後、まんじゅう2個とか、キャラメル1個と引き替えてくれるんです。これが子供たちの楽しみでした。大人が福笹を背中にたらししていくもんですから、子供の私たちは、後からその紙切れをばっちぎって、逃げて来るのです。今では「福笹」もほとんどなくなったようです。形としては、似たようなものが残っているようですが、そういう景品の引き替え券というのは無くなったようです。

一方通行の大パレード

現在のどんたくは、5月3、4日に博多駅から大丸デパートの所までコースが決まっております、ここを大パレードが遠々と練り歩くわけです。さっき申しましたよう

に、昔のどんたくは、まあ多くて20人、普通7～8人ぐらいのグループで各町内を行ったり来たり回るわけですね。ところが、今はもう大パレードになって、何かすごい音をたてながら回りますね。昔のような三味線、太鼓でちんちりんぐらいやったんじゃない話にならんわけです。結局、道幅が広くなると音も響かなくなって、ああいう大きながんがんだような音になってしまうわけです。交通巡査が一方通行にしてしまうのでおもしろくなくなりました。

一方通行では誰が「どんたく」に出ているのか、先頭に出ている人は全然わからないわけですね。ましてや出てる人同志の交流なんて望めないのが実情です。昔ですと、行き交う楽しみがありました。とりわけ、うちのおやじなんかがいっとりましたが、非常に好きな芸者がいて、どんたくのときだけは、金はないけど彼女とふたりで出てみたい。

そこで、「何日の何時ごろ、どこどこを通るので、そのころあんた来て。」とこうなるわけですね。そして行き交うとき、「早う来い、早う来い。」といって、ばっと連れて人混みに紛れ、わからなくしてしまっただけなんです。

そうなれば、花代は向こうのだんなに持たせるというようなことができるという。非常に楽しみだったようです。しかし、町が大きくなるにつれ、そういう情緒みたいなものが無くなってしまいました。

舞台も昔は町の中にはほとんどなく、家の中にはいて、そこで踊るということだったのが、今は市内のあっちこっちに舞台があって、いろんなかたがたが、踊ったりなさるというようになっております。私どもはどうも古いほうなんで、やっぱり昔のどんたくが懐かしく、昨年の夜は、10人ぐらいで三味線を弾きながら、旧博多のいわゆる太閤の町並みを回ってみました。静かな夜、三味線やどんたくばやし、新内なんかを流して町並みを回りますと、寝ていたおばあさんやおじいさん達が、「こりゃ懐かしな」といって、今でも外へ飛び出していらっしやいました。そして、「どうぞ家に寄ってください」というようなことで、夜の11時ぐらいでも接待して下さる博多の人の良さをしみじみと味わいました。

博多仁和加の思い出

私が、まだ四つぐらいのとき、おやじが一生懸命踊りを教えてくれるんですが、なかなかうまくならないもんでそれならということで、博多仁和加をやらせられたもんです。

博多仁和加というのは、落語と同じように最後に落としがあって、それを博多弁でやるわけですが、たとえば「ふてえがってえ西島さん、あなたどっかい旅行しござあとですな」「へえ、どこ行きよと思うな。」「うん、あんたのトランクの中に石鹼と手のごいば入れとるけん、はっあ、ニューヨーク（入浴）に行きよ。」というふうなことですね。

「坊さん、坊さん、そげな高い所に登とったら、こき

落ちなごすばい。」「ほら、落ちなごしたあ。」「坊さん、あなたどっか痛うござっせんな。」「あたし、坊さん、毛がない。毛がない。(怪我ない。)」なんていうようなものですね。

そういう仁和加を子供のときに教えられるわけで、たとえば、「そんな高い木に登って何をちぎりよるのか。」「ザボン(朱欒)」といったりでですね、あるいは「昨日のお菓子はうまかったけん、もうちょっとかな。」「もう、なか(最中)」といったりでですね。そういうふうなことをやらせられるわけです。

これもやはり子供のときの話ですが、「とうふ屋のおばさん、表に女の腰巻きを干しとくちゅうことがあるもんかい」「いいや、こりゃあ腰巻きじゃあござっせんばい。とう

ふ屋のこし袋ですばい。」「ははあ、どうりで豆くさか。」なんて。わかりますか?そういうことをですね四つぐらいのときにおぼえさせられて、そしてやってたんですね。するとみんなが笑うんですが、その意味が全くわからなかったんです。14、5歳になって色気づいて、はじめてわかったような感じでございます。

たとえば、朝飯を食べとつても、「しょういうことをいうな」とかです。まあ、そういうことを子供のときからおやじが教えるもんですから、何となくそういうふうになってしまう。それはよく考えてみますと“人の前でおじおじするな”、“はっきり物をいえ”という教訓ではなかったろうかと良心的に解釈いたしております。

(受付1982年12月6日)

新製品紹介

光色が自然昼光に近い昼白色蛍光ランプ
《メロウホワイト》

東京芝浦電気株式会社では、自然昼光に近い色温度 5000 K でさわやかな光色に加えて、器具の白色感・透明感が向上するなど快適照明が可能で、蛍光灯器具の多様化、高級化に対応した昼白色蛍光ランプ《メロウホワイト》を発売した。

従来の白色あるいは昼光色蛍光ランプは、物が青白くあるいは黄色く見えるなど、色の見え方がやや不自然であった。

昼白色蛍光ランプ《メロウホワイト》は、通常の蛍光ランプに使用されているハロリン酸カルシウムをベースとし、これに希土類蛍光体を混合して使用することにより、白色蛍光ランプなみの明るさで、自然昼光に近い色温度 5000 K を実現したも

＜特 性＞

形 名	大 小 区 分	寸 法 (mm)		定格入力電 圧 (V)	定格ランプ力 電 (W)	ラ ン プ 電 流 (A)	全 光 束 (lm)	定格寿命 (時 間)	標準価格 (円)	備 考
		管 径	管 長							
FL 10 W-F	10	25.5	330	100	10	0.230	460	5,000	400	
FL 15 W-F	15	25.5	436	100	15	0.300	820	5,000	400	
FL 20 SS-W-F/18	20	28	580	100	18	0.350	1,170	7,500	400	※
FL 40 SS-W-F/37	40	28	1,198	200	37	0.410	2,950	10,000	600	※
FCL 20 W-F/18	20	29	外径 205	100	18	0.365	1,060	5,000	750	※
FCL 30 W-F/28	30	29	226	100	28	0.600	1,600	5,000	820	※
FCL 32 W-F/30	32	29	300	147	30	0.425	1,960	5,000	1,050	※
FCL 40 W-F/38	40	29	375	200	38	0.425	2,680	5,000	1,300	※
FLR 40 S-W-F/M/36	40	32.5	1,198	230	36	0.440	2,850	10,000	670	

※印 節電形(ワットブライター)
色温度 5000 K, 平均演色評価数 $R_a=72$

(問い合わせ先 東京芝浦電気株式会社照明事業部 照明市販営業部)
〒101 東京都千代田区神田駿河台 1 の 6 主婦の友ビル 電話 03-233-2392)

- のである。
- ＜特 長＞
- (1) 色温度 5000 K と自然昼光に近いさわやかな光色、白い色を最も白らしく見せることができる。
 - (2) 器具の白色感、透明感が向上。
 - (3) 明るさを変えずに電気代を節約できる節電形。